

読売・昭女大 女性アカデミア21
(2005年10月22日(土)実施 昭和女子大学グリーンホール)

母 と 娘

— 葛藤・自立・継承 —

司会 皆様、本日はご参加いただき、ありがとうございます。

これより、読売・昭女大 女性アカデミア21「母と娘 — 葛藤・自立・継承」を始めます。
初めに、読売新聞調査研究本部総務、佐藤三千男よりご挨拶をさせていただきます。

佐藤 どうも皆さん、こんにちは。読売新聞社の佐藤でございます。

本日は、小雨が降る中お越しいただきまして、誠にありがとうございます。

読売新聞社は、グループに中央公論新社というのがありますが、そこと一緒に、女性の生き方等をテーマにした女性フォーラムを開催しております。これを大学の場に移して、いろいろ考えてもらおうというのが、この女性アカデミアでございます。昭和女子大とのアカデミアは、昨年に続き二回目になります。

本日は、「母と娘」というテーマでして、ぜひ男性にも聞いてほしいテーマだと私は思います。そういう意味で、私も大変楽しみにやってきました。今日のお話の中で、そうか、そういう考えもあるのかとか、一つでもこれからのヒントになるようなものがあれば、それをぜひお持ち帰りいただければと思います。本日はありがとうございました。

司会 続きまして、昭和女子大学の人見楳子理事長がご挨拶いたします。

人見 昭和学園の校庭でも、キンモクセイの香りが漂ってまいりました。皆様、ようこそおいでくださいました。そして、学生、教職員の皆様こんにちは。

詩人であった昭和学園の創立者の詩に、「女性文化」と題するものがありまして、その中に「男性のつくる文化は破壊的で征服的で、アダム・イヴの昔から現在まで、つくっては壊し、壊してはつくる、果てしない戦争を楽しんでいるかのような文化である」。これに対して、「女性の文化は平和である」と、同じ詩の中で創立者は次の言葉で説いています。「悲田院や施薬院をつくった光明皇后、ゲーテの母やキュリー夫人の慈悲と理解と調和を旨とする女性の美德、女性の文化が役立って、平和が長く、戦争が短くなるようにと努力したいという希望」をもって85年前に文豪トルストイの教育理念でもある「愛と理解と調和」を頭に置きながら、この学園は始められました。

「世の光となろう」という言葉を建学の精神として、どんなに小さい光でもいいので、みずから進んで社会に貢献できる女性、あるときは男性をリードできるような賢い女性をはぐくむように努力して、今日も研究・教育に励んでいるつもりでございます。このような女子大学の研究、教育を、一般社会及び一千万人以上の読者と共有しようという考えで、女性アカデミア21を企画していただきました読売新聞の皆様、心から御礼申し上げます。

卒業生には、社会で大きな貢献をして、立派な業績を残されていらっしゃる方もたくさん増えて、今日、講演をお願いいたしました馬場あき子先生も、その先端を行かれる学園の誇りのお一人でいらっしゃいます。

今回の女性アカデミアのテーマは、「母と娘」ということですが、日本の古典における母と娘について知るとともに、特に若い方は、こういうこともあったのかということ、きつとお話の中からいろいろ学ぶことがあると思います。また、新しい時代の母と娘のあり方を考えることは、昭和女子大学にとって不可欠の課題でありますので、さまざまな角度から母と娘の関係を考えていただきたいと思います。

基調講演をさせていただきます馬場先生、それからパネリストの皆さん、そしてご参加くださいました皆様に、改めて御礼申し上げます。そして、学生の皆さんも、講演と議論を思う存分楽しんでいただきたいと思います。ありがとうございました。

司会 それでは、歌人、評論家の馬場あき子さんに基調講演をしていただきます。

テーマは「古典に見る母と娘」です。では、よろしく願いいたします。

馬場 今から一時間というお約束でお話をしたいと思います。日本の古い社会において母と娘はどうあったのか、殊に和歌という世界の中に、母と娘の歌はあるのだろうかということ

お話ししたいと思うのですが、実に残念なことに、母と娘の歌というのは極めて少ないのです。どうしてなのだろうか。少ないということが、やはり一つの問題提起になるのではないかと思います。

まず、息子の名が母を表わすというのはあるのですけれども、例えば右大将道綱母とか、成尋阿闍梨母とかいっぱいあります。けれど、それらはなぜかみんな男の子のお母さんなんです。女の子のお母さんは一体どうなっているんだろうという、『万葉集』の中の坂上郎女とその娘・大嬢には贈答歌がある。それから、飛んで平安時代になると、和泉式部と小式部内侍の母娘の贈答歌がある。

あとは、赤染衛門とか、伊勢の娘の中務とか、そういう人の歌はありますけれども、みんな娘が死んだときの歌とか、お母さんが死んだときの歌とか、一体生きているうちはどうだったのと聞きたいくらい少ないんです。ということは、母と娘の関係が密接過ぎたということが一つあるのかもしれませんが、もうわかっているという関係があったかな、とも思うんです。

例えば『万葉集』の中には親子の歌はある。中でも代表的なのは、山上憶良の子どもをしのぶ歌とか、亡くなった我が子古日をしのぶ歌がありまして、これが子どもを歌う歌の代表になっていますね。お父さんの情と、お母さんの情と、それほど違うものではない。山上憶良のものですけれども、あまりにも有名なものを一つ読んでみたいと思います。

「うり食めば 子ども思ほゆ 栗食めば まして偲はゆ 何処より 来たりしものぞ 眼交ひに もとな懸りて 安眠しなさぬ」というのがあります。ウリを食べれば子どものことが思われる、クリを食べても子どものことが思われる、一体子どもというのはどこから来たものなんだろうか、目と目の間に子どもの顔が浮かんでいて安眠もできない、というお父さんの非常に深い愛情。

そして、その後には、どれだけの人に愛唱されたかわからない反歌、「銀も 金も玉も何せむに 勝れる宝子に及かめやも」という非常にすごい歌があります。

それから、山上憶良が古日という、子どもに死なれたときに、非常に長い歌があるんですけども、終わりだけかいつまんで申しますと、病気になっていた子どもが「漸々にかたちくつほり」、顔かたちが日ごろの子どもではなくなっていく。そして、「朝な朝な」、言うことがなくなっていく、言葉がだんだん少なくなっていく。そして、「玉きはる 命絶えぬれ」、顔かたちが変わり、言葉を発するものが少なくなり、ついに息子の命は消えてしまった。

その後、親の気持ちです。「立ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き 手に持てる 我が子飛ばしつ 世の中の道」というんです。「手に持てる 我が子飛ばしつ」、自分が抱きしめていたつもりでいた我が子を、人間にはわからない遠い遠いあっちのほうに飛ばしてしまっただけで、「我が子飛ばしつ」というところに無限の感動が含まれている。子どもを失った親の気持ちというのは、万葉のときから今まで少しも変わらないので、実にこの「立ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き」、そして手に持っていた、抱きしめていた我が子を、もう手の届かないところに飛ばしてしまっただけで、これが世の中の無情という道なのだろうかという歌で、非常に細やかに、情のこもった激しい歌です。

こういう父と子の歌、父と子の情は、母と娘の場合だって同じだった。ただ、母が、また逆に言えば子とその歌を残してくれなかっただけなんです。ここで言えば、ぜひ皆さんは残してください。歌を詠むのはいいことですよ。こういうふうには千年以上も自分の言葉を残すことができるんです。

そして、女性の文学というのはどのようにして始まるかということ、女性にとって一番大切なことは恋愛だったんです。あっ、いいなと皆さんは思うかもしれませんが、昔の恋愛というのは今の恋愛と違っていて、どういう男性を選ぶかによって家の運命が、栄えるかということが、家の一員としての女の役割になっています。

例えば、上流階級と中流階級と非常に下の階級では、女の教育も随分違ったと思います。万葉集時代には奴隷がありました。ですから、奴隷の家に生まれた娘はやはり奴隷なんです。そういうときは、女というのは労働と性と、この二つかしか役割を負ってないわけです。

だから、恋愛なんていうものは、できたかできないかよくわかりません。過酷な労働の間でもし男性と関係が生まれて、赤ん坊が生まれれば、それも奴隷なんです。女の子が生まれても、男の子が生まれても、慢性的な人手不足の中で、それは一つの労働の手が生まれたわけですから、だれも文句も言わなかった。このところはなかなかよかったかもしれません

けれども、そういう立場でしかないということです。

それから、中流階級というのは大体、国守クラスです。そういうところでは、やはりどういう貴族に見初められて、どういう高いところに女性が嫁入りしても、あるいは愛を受けて側室になったとしても、おかしくない教養をつけておかなければいけないというので、女性には和歌が詠めるということが一番大切でした。これが社交の場の物言い様式でもあったからです。

上流つまり、参議になれるような家、あるいは従三位以上、大納言、中納言以上は、その家から女御、更衣を出すことができましたから、非常に高い教養を娘につけさせて、そして娘はなるべく人前に見えないように、家の奥で高い教養をつけさせて、高い教養を持った侍女に囲ませて育て上げたのです。姫というのは「秘め」なんです。秘めておくから姫なんです。秘められて育ったものなんです。

ですから、そこに母娘の関係は、かなり密接な場面もありましたけれど、少し大きくなると、男のきょうだいと女のきょう代いは別に暮らさなければならぬ。昔は、男女七歳にして席を同じうせずと言いましたけれども、もっと昔においては、赤ちゃんのうちからお母さんのもとをやや離れる。会うことは会うんですけども、実際抱き抱えて、おっぱいを与えるのは乳母です。お乳の豊かに出る女を探してきて、しかも教養の高い女を探してきて、それを乳母として子どもの養育を任せるのが、貴族の家の習いだったわけです。

そういうわけですから、母と娘というのは、折あるごとに贈答はしますけれども、子どもに直接的に教養をつけさせるのは、お父さんが雇った家庭教師であり、世間の常識は乳母が与えたということが考えられるわけです。

そういう中で、特別に『万葉集』で目立つのは大伴坂上郎女、これは大伴旅人の妹で、家持のおばさんにあたるわけで、非常に教養が高い。まだ十代の若いときに穂積皇子という人に愛されて、『万葉集』の中でも特筆されています。穂積皇子は、昔でいったらおじさんですね。片一方は十代の少女。愛されることは並びなかった、世評に上るくらい、おじさんのな夫に郎女は愛されたんですが、穂積皇子が亡くなる。

そうすると、今度は第一級の貴族、藤原麻呂に求愛されるんです。大伴家でも、藤原氏との結婚は政治的に非常によいものだから、お母さんも賛成したと思いますけれども、そういう中で麻呂が通ってくるんです。しかし、この結婚は身分の違いもあり、微妙な政治的な情勢もあって、成功しなかった。坂上郎女は怨恨の歌を『万葉集』の中に残しています。

最後に、坂上郎女は一族の大伴宿奈麻呂という人と結婚をしまして、そこに坂上大嬢、坂上二嬢という二人の娘をもうけるのです。

こういうかなり社会的、政治的な場で生きてきた、言ってみれば一級の社会人として生きてきた坂上郎女が、この二人の娘の教育と結婚先について、非常に心を使ったことは言うまでもないわけです。ここにお母さんの一つの典型があります。家伝来の領地である跡見庄、竹田庄へ、坂上郎女は自分から出かけて行って、田んぼのできがどうか、実りはどうか、シカやイノシシ、あるいは盗人に稲が盗まれていないか。そういうのを監督して歩くわけです。

その跡見庄から、娘にあてた歌と短歌があります。長い歌は省いて、短歌のほうだけ読んでみますと、こんなのです。とてもかわいらしい歌です。「朝髪の 思ひ乱れて」、朝の髪、寝起きの髪です。朝、起きた髪は、もうくしゃくしゃに乱れている。その髪が乱れているように「思ひ乱れてかくばかり」、髪が乱れているように「汝姉が恋ふれぞ」。汝姉というのは、自分の娘のことを、愛称で、お姉ちゃんというような気持ちで呼んでいるんですね。「朝髪の 思ひ乱れて」、これほどにもお姉ちゃんが私のことを恋しく思っているだろう。「汝姉が恋ふれぞ夢に見えける」、おまえが私のことを恋しく思って、お母さん、お母さんと思っただろうから、そのおまえの姿が夢に見えたよという歌をつくっています。「汝姉」という言葉、いいですね。

「朝髪の 思ひ乱れてかくばかり 汝姉が恋ふれぞ夢に見えける」、こんなお母さん、私にもあればよかったなという感じがする歌です。この娘は成長して、やがて大伴家持の妻になります。そして、越中にも一緒に下っていく。越中守大伴家持の妻として、あの越中に下っていくんです。

越中の珠洲岬というところからはアワビがとれる、アワビだけではなくて真珠もとれたんです。家持は、そこから都へ真珠を、今より大きかったでしょう、何連も贈っているんです。

だから、貴族は真珠のネックレスを三つぐらい首にかけていたと考えられるんです。

そういうところから、成長した大嬢がお母さんに贈った歌を一首だけ述べておきます。「白玉の 見がほし君を見ず久に 夷にし居れば生けるともなし」、白玉を見飽きないようにずっと見ていたいお母さんという、この「白玉の」という形容に、ちょうど特産品の真珠が想像されるわけです。白玉のように輝いている、見ていて飽きないお母さんを、もう見ないで随分久しいことたっていました。そして、私が越中にいると、もう恋しくて恋しくて、生きているとも思えないという歌なんです。

実は、坂上郎女はさっき言ったように絶世の美人だったけれども、この大嬢も絶世の美人だったらしいんです。大伴家持に恋歌を贈る女は十人以上いますけれども、その中で大伴家持が終生愛した大嬢の美貌は大変なものだったらしいので、その辺がうまくよくできたものですね。これがもしあまり美しくなかったら、どうだったかなという想像もできるのですが。

それはそれとしまして、『万葉集』の十一巻というのは無名者の歌で、典型的なものであまり読まないんですけれども、そこを丁寧に読んでみますと、実はこの無名者の歌がおもしろいのです。なぜならば、全部恋の歌なんです。ありきたりの恋の歌なんですけれども、その中に時々、母娘の姿が出てくるんです。

例えば、こんなのがあります。「たらちねの 母が手離れかくばかり すべなきことはいまだせなくに」ということで、お母さんの手を離れて自立した女になった。もうちゃんと成女の印もあって、髪も結って、立派な自立した女として生きているのだけれども、「かくばかり すべなきこと」、どんなことが起きたんだろう。例えば、二人の男から思われちゃった。事件としてはこういうのが一番多かったんです。女が二人の男から好かれた場合に、どっちの男をとるか、またどっちにも思いがあって、どっちも捨てられない場合にどうしたらいいか。そういうとき、やはり万葉のころはお母さんに相談したんだけれども、「かくばかり すべなきこと」、自立したもののどうしたらよいかわからないことは、まだかつてなかったということで、一人で悩んでいる恋の悩みというのが出てきます。

それから、男のほうとしては、これもおもしろい歌なんです、「たらちねの 母が養ふ蚕の繭隠り 隠れる妹を見むよしもがも」と言っているんです。たらちねのお母さんが飼っている蚕が繭にこもるように、どこかに隠れてしまっている愛人に、どうやって会ったらいいだろうかというんですけれども、この歌は微妙におもしろい。

なぜなら、その当時のお母さんは蚕を飼う権利を持っていたんです。お母さんは蚕を飼う、そして養蚕に励んで絹をとる。その絹は、多分、家の役に立ったでしょう、そしてまた税金の対象にもなったんでしょうけれども、やはりお母さんと娘の権利のある上がり物だったのではないのでしょうか。

それで、蚕が忙しいときは、お母さんは繭ごもりをするように娘をしっかり自分のそばに引きつけておいて働かせたでしょうし、技を伝承したでしょう。また、同時に男から見ると、まるで蚕が繭にこもっているように、自分に恥ずかしがって出てこないのだとか、世間をはばかり出てこないのだというような比喩的形容にも使われたのが、この「たらちねの 母が養ふ蚕の繭隠り」という言葉で、『万葉集』の中では何カ所にか出てきて、非常に印象深い言葉、当時の生活が見える言葉です。

まだあります。お母さんというのは恋愛の障害になったという歌です。「たらちねの 母に障らば」、たらちねの母がもし自分たちの恋の障害になっていたなら、お母さんの思惑にかかずらわっていたならば、「いたづらに 汝も我れも事なるべしや」、もうむだで、おまえも私もいいことはないよと言っているんですね。お母さんというものがとても怖い、そして自分たちの恋愛がお母さんに知れてしまったら、決していいことはないというのは、二人とも条件が悪かったんでしょうね。もしかしたら、男の家がちょっと財産が低いとか、女の家が富裕であったとか、そういうこともあります。その当時のお母さんは、より高いところに娘を嫁がせたい。財産があって、立派な男と結婚させたい。それなのに、娘は財産の少ないほうの男に恋をしてしまった。男も一生懸命というとき、「たらちねの 母に障らばいたづらに 汝も我れも事なるべしや」、いたづらになってしまうだろう、二人の仲はむだになってしまうよというんですね。

お母さんはどんなだったかという、「誰れぞこの 我が宿に来呼ぶたらちねの 母に嘖はえ物思ふ我れを」というんですが、「誰れぞこの 我が宿に来呼ぶ」、私の寝屋に来てトン

トンと戸をたたいたり、おーい、おーいと呼ぶのは誰ですか。実は、たらちねのお母さんから、あの人に会ってはだめと。「嘖はえる」というのはしかられることです。お母さんにしかられている、そして物を思っで悲しんでいる私の窓のところまで来て、入り口まで来て戸をたたくのは誰ですか。いや、あの人に決まっているんです。でも、わざと誰ですかと言っているんです。あの人がお母さんにしかられて泣きそうな私のところに来て、早く出ておいでと言って、入り口をたたいているという歌もあります。

そして、「たらちねの 母に知らえず我が持てる 心はよしゑ君がまにまに」、お母さんに内緒にして、私が密かに持っている好意というのは、もう何があっても構わない、お母さんなんか問題ではない、あなたのみまです、ということがあるんですね。

もう少し読んでみましょう。「かくのみし 恋ひば死ぬべみたらちねの 母にも告げつ止まず通はせ」、この娘さんはまんまとお母さんの許可を得たんです。いろいろと言って、あの男性と交際してもいいというお母さんの許可を得た。その場合どうなるのか。

お母さんの許可が得られると、今度、男は公認の婿として通ってきます。昔は婿取り婚ですから、女の家毎晩男が通ってきたんです。しかし、男は比較的自由で、二人、三人の女に通うことも可能だったんです。女はうちで待っていますから、どうしようもないけれども男は内緒で三人の女に通う。もしも三人の女の中で、財産があって、優しく、きれいなら一番いいですね。そういう女のところに定着して行って、その女の家を世話を受けるようになる。すると、婿にその家は、衣装から、位が高い家では刀とか、扇とか、沓とか、冠とか、あらゆるものを男のために世話するわけです。「いだしたてる」というんです。男を世にいだしたてる、男が恥ずかしくないだけの服装を整えてやる。

そういうわけで、その家に男は定着していく。そうすると、A、B、Cといった女のAとBは、だんだん男が通ってこなくなるわけです。それは女の恥であり、家の恥だったわけです。これはお母さんが大変です。また娘もお母さんに、非常に言いわけが立たない。それで、「母にも告げつ止まず通はせ」ということになるんです。私はあなたのことをお母さんにもう承諾をとってしまいました。さあ、こうなったら毎晩通ってきてくれなくては嫌ですよ。毎晩通うのって大変ですよ。だんだん毎晩通ううちに、暁に帰るんですけども、帰らなくなって、女の家から出勤するということになる、これはもうほんとうの婿になったことになります。

あの『源氏物語』の中で、夕霧の大臣は子どものときから好きだった雲居雁と結婚しますよね。しかし、柏木の未亡人である女二の宮落葉宮に同情してしまって、そこも恋愛ができてしまう。後半がもう大変になってしまって、雲居雁がかんかんに怒ってしまう。それをやっとなだめて、おもしろいですね、月のうち十五日は雲居雁の家に、後の十五日は落葉宮に、一日おきかもしれませんが、とにかく夕霧は一日おきに女のもとに通って、そこで寝泊まりをしたわけですから、結構昔の男も気を使って大変だったな、今のほうがいいんじゃないかと思うんですけども、そういう場面。「止まず通はせ」という非常な制約がかけられることになります。

また、お母さんが許してくれないので、男との密会の場面もたくさん歌われていますが、例えばこんなものがあります。「あしひきの 山沢ゑぐを摘みに行かむ」、ゑぐというのはクワイです。あしひきの山沢にクワイをつみにいきます。「摘みに行かむ 日だにも逢はせ」、その日だけでも会ってください。「母は責むとも」、結句にやはりお母さんが出てくるんです。クワイをつみに行ったけれども、ほんとうはかごにいっぱいつんでくるクワイが、夕方までに十個しかなかった。どうしてきょうはこれだけしかつんでこないの、あ、あの男と会っていたね、おまえ、なんていうのが、お母さんのしかりになるわけです。そういうことがあったとしても、ぜひその日は山沢に待っていて、私と一緒に話をしましょう、という歌なのではないでしょうか。

そういうときの娘たちは、どんな服装をして行ったんだろうかという、男の歌です。「父母に 知らせぬ子ゆゑ」、お父さんやお母さんに内緒にしておくかわいい子がいるんだ、自分は妻にしたいと思っているんだ、そして野原で待ち合わせをしている。

「三宅道の 夏野の草をなづみ来るかも」というので、夏野の原っぱを歩きながら、草が高いので、そこを分け分けその少女がやってくるんですけども、その少女の姿は、真っ黒な髪、黒髪に麻の糸をもって、アサザという黄色い花を、これはリンドウ科の水辺に咲い

ている植物なんですけれども、男に会うために、黒髪に黄色い花を麻のひもで結びつけて飾ってきた。ふだん着ながら、髪には花をかざしてやってきた。

その心が男はうれしいんですね。自分のために花を飾ってやってきた少女が、かわいくてならない。父、母に知らせぬ子なんだけれども、自分のために髪に黄色い花を結んでやってきたよ。そして、その花をヤマトぐし、ツゲのくしで押さえてあるんだ。いいな、あの子はというんで、やはり男の目から見ると、自分のために着飾ってくれる女ってかわいいんじゃないかしら。

それから、いろいろあります。子どものころにお母さんが童謡を教えてやる歌が、十六巻に出てきます。どんな童謡かという、お料理の伝授です。ちょっと詠んでみますね。

「鹿島嶺の 机の島の」、これは能登の国の歌の中に出てくるので、能登の七尾の港の近くにある山だということですが、その鹿島嶺がある机島にシタダミがある、巻き貝がある。現代では、それをコシダカガンガラと地方名で呼んでいるそうですが、サザエのようなもつと小さいシタダミがある。

そのシタダミを拾ってきて、「石もち つつき破り」、石でもってその貝をコンコンと割りなさい。そして、早川の瀬に洗いすすいで、辛い塩でゴシゴシともんで汚いところを全部取って、そしてそれをまた水で洗って、高坏に盛り、足のついた机の上にそれを置いて、うやうやしくお母さんにささげなさい、かわいい小さい奥さんよと言って、お料理のつくり方を伝授している。

ままごとのお母さんのような、まだままごと遊びが好きそうな十歳前後の幼子に、こうやるとおまえが嫁に行ったときにお母さん喜ぶよとか、それから私にもしておくれというのが、言外になっているので、小さい貝を塩もみで生で食べる方法。昔はそういうことが多かったでしょうね。そういうことを『万葉集』では、まだまだ見つければ似たような歌がたくさんあるような気がします。

しかし、平安朝になると、だんだんこういう中流、あるいはそれ以下の人たちの恋愛の現場を歌った歌がなくなっていく。そして、やはり勅撰集時代ですから、中流と上層階級の歌ばかりになっていくわけなので、さっき言いましたように、お母さんがいろいろ教えるのは六つ、七つくらいまで、その後はちゃんとした家庭教師のような女性が、女の子にいろいろと教えたんでしょう。紫式部も、後の上東門院彰子に、白楽天の『楽府』だとか、『日本紀』なんかを講義しています。それから、書道も、『源氏物語』なんか見ると、お母さんかお父さんが小さいときに教えていますね。

つまり、上流階級ではお父さんとお母さんが先生だったわけです。お琴の弾き方もお母さんや侍女が教える、お父さんも教える。そういうことですね。『枕草子』の中でしたか、まずは『古今集』二十巻をそらんじたまえ、というのが女の学問でしたね。それから、お琴をいつでも弾けるように、何曲もレパートリーをつくっておきなさいということも大切だった。それから、男と手紙のやりとりをするとき、女の姿、形は見えませんが、その筆の文字でもって女の姿を想像されるので、筆書きの仮名文字をよく書くように、これが女性の三教育だったんです。

どうして『古今集』二十巻をそらんじるかという、大体、女は地の言葉で「嫌よ」とか、「そんなの好きじゃない」なんていうような言い方はしないので、『古今集』の中にある言葉で、嫌だとか、好きだとか、待っているとか、そういうことを言ったものなんです。お互いに歌でもって贈答をしたわけです。そういう教養をつけておくわけです。

その中で、『後撰集』の八巻、冬の部にこんな歌があります。「人の娘の八つになりける」、八歳の子どもが、お母さんが遠出をしてなかなか帰ってこない。その夕暮れに悲しくなって詠んだ歌、「神無月 しぐれふるにもくる日を 君まつほどはながしとぞ思ふ」、随分整った歌ですね。八歳ですよ。今でいうと七歳か。神無月の時雨が降ってくるにつけても、しかも時雨が降って夕暮れになってくる日、そういう寂しい日、あなたを待っている、お母さんを待っているときは、ほんとうに長くて悲しいと思っています、というのです。

まま子の歌もあります。これは説話の中ですけれども、例えば源俊頼という院政期の歌人が、何か歌に行き詰まったとき、この歌を口ずさんでは涙を流したという歌です。少女の歌です、まま子の歌です。まま母が、自分の子どもにだけ、ままごと道具のおもちゃを与えて、おなべとかお茶わんを与えてままごと遊びをしているのに、自分にはそういうおもちゃをく

れない。そういうときにウグイスが鳴いた。それを聞いて、小さい声でこの小さいまま子の少女が詠んだ歌です。

「鶯よ などさは鳴くぞ乳やほしき」、おっぱいが欲しいのか、「小鍋やほしき」、あの人が使っているちいちゃいおもちゃのなべが欲しいの？ 「鶯よ などさは鳴くぞ乳やほしき 小鍋やほしき母やこひしき」、源俊頼卿は常に常にこの歌を読んで涙を流し、そして新しく歌をつくる気持ちになったというんです。

俊頼という人はなかなか官位も進まなかったし、お父さんは立派な人だったけれども、なかなかこの人は昇進しなかった。「乳やほしき 小鍋やほしき母やこひしき」、最後がきいていますね。「母やこひしき」、自分にお母さんがいない、ウグイスはなぜ泣くのか、お母さんが恋しいのかという結句が、実にほろっとさせるところです。

それから、もっとおもしろいのは、母が娘にかわって歌を詠んでやるという場面がある。これは昔のお母さんによくあることで、恋人が娘のところに来なくなってしまおうと、お母さんがかわりに歌を詠んで婿を呼び寄せるところがあるんです。

それからまだ、赤染衛門は歌が達人だったので、娘のもとに通ってくる男が久しく通ってこなかったくせに、ちょっとお祭りのときの太刀がいるようなんだけど、整えてくれないという無心を言ってきた。婿をもらうほうの家としては、そういうものを整えてやらなきゃならないんですが、憎らしいからそういうときに、どうしてうちに来ないのに無心だけするのかと言ってやるとか、そういうお母さんと娘、娘にかわって男を恨む歌や、いろいろな歌が出てきます。

そういう中では、古典の和歌の中で最高の絶唱と言われているのが、娘小式部を失くした、ときの和泉式部の歌だろうということになります。

その歌はどういうときに詠まれたかという、『式部集』によると、小式部内侍はいつも上東門院に通うとき、萩の花に露の置いた唐衣を着ていた。その唐衣を上東門院が非常に印象に残っていて、亡くなった後、和泉式部のところにそれがあんなら私にください、おまえの娘の小式部を甲斐でやる、そのお経の表紙に、あの萩の花に露の置いた唐衣を使いたいというお手紙をくれたので、非常にうれしいような、悲しいような思いで、「置くとし 露もありけり 儂くて 消えにし人を何にたとへん」という歌を詠んでいます。

続けてもう一首、これが大変な絶唱です。「とどめおきて 誰を哀れと思ひけん 子はまさるらん子はまさりけり」。「とどめおきて」、この世に残しておいて、あの子は一体誰のことをかわいそうと思っているだろう。母の私だろうか、いや、そうじゃない、産み残していった子どものことに違いない。「子はまさるらん子はまさりけり」というんです。親よりも子どもはまさっているだろう、自分だって親よりも子どものことをこんなに愛しているんだから、「子はまさるらん子はまさりけり」、これを超える親の子を思う歌はなかなかないですね。「とどめおきて 誰を哀れと思ひけん 子はまさるらん子はまさりけり」。

もっとも小式部内侍も、重病にかかったときに、もう死にそうな目をようやく開いて、「いかにせむ いくべき方をおもほえず 親に先だつ道を知らねば」という歌を詠むと、どこかから不思議な声がして、「あなあはれ」と聞こえた。すると、すごい熱があった体からすうっと熱が引いて、命が助かったという逸話も残されています。

ところで、『源氏物語』、この物語の中ではいろいろな母子関係がたくさん出てくるわけです。さっき言いましたように、ここでは上流階級の母娘関係が主に書かれているわけですが、上流階級の家では、乳母が姫君の教育をしたという話をしました。そして、乳母がその姫君と一生の運命をともにするわけです。

例えば、夕顔が亡くなる。六条河原院で夕顔が亡くなると、その夕顔の忘れ形見、実は頭中将との間の娘ですけれども、その子どもを抱えて、乳母は自分の夫に従って筑紫（九州）まで落ちて行って育てます。そして、大事に育てて、九州でたくさんの人から求婚されるけれども、絶対に土地の権力のある人に姫君を渡さない。この姫君は実はかたわであるなどと言って偽って、ある夜、船に乗って都に、海賊に追われるような思いをしながら逃げてくるんです。そして、都に着いて、お金もだんだんなくなる、頼るところはないという中で、小さな家で頑張っていて、初瀬の観音様に幸運をお祈りに行くと、そこで夕顔の乳母だった右近とめぐり合うわけです。そして、この玉鬘の運命が開けていくというお話があります。

ほとんどお母さんにかわる働きをするのが乳母であり、また娘もお母さんに次いで、ある

いは以上に頼りになるのは乳母であったわけです。

末摘花の乳母もそうです。源氏が須磨に流されてしまうと、侍女や召使たちはみんな離散してしまいます。しかし、乳母だけは残っているわけです。身分の高い人には乳母が二人も三人もいるんですけれども、その中の一人の乳母は残っていて、源氏の訪問をあのぼろぼろな家で迎える。そして、幸運が戻り、末摘花の家に仕えていた者が全部戻ってくるわけです。

乳母たちは、なぜそんなに一生懸命に忠勤を励むかということ、姫君の運命と自分の運命とは、それが栄えるか、没落するかも姫君次第であったからと言えますね。

そして、やはり『源氏物語』の中では、明石御方と明石姫君ですよ。源氏が須磨に流されていたとき、明石入道が自分の家に源氏を引き取る。そのとき、姫君を一人持っていたのを、お母さんと相談すると、お母さんはそんな公からとがめがあって、須磨まで流されてきた罪人のところに、自分の娘をやるのは嫌だと初め言うんです。しかし、お父さんの説得によって源氏を迎え入れる。そこに子どもが生まれる。これが明石姫君です。

源氏が都に召還される。そして、明石一家では、この後、運命はどうなるんだろうと思って住吉神社に参詣したとき、そこで源氏にめぐり合う。それから明石の運命が開けていくという場面があります。そして、今の大堰川の向こう側の桂里に、明石入道は臨時の家を建てて、そこに明石親子を住まわせているわけです。

そのとき、明石姫君は紫上の養女になるわけです。お母さんと離されてしまったわけです。源氏があるお正月、姫君の部屋を訪ねてみると、もう養母である紫上とも別のところにこの姫君はいて、姫君の周りには乳母たちがいるわけです。そのお母さんのところから、お正月の贈り物に添えられた歌があった。

「年月を まつに引かれて経る人に 今日鶯の初音聞かせよ」、年月を松の成長、姫小松のような姫君の成長に引かれて待っている私に、今日こそウグイスの初音を聞かせてください。つまり、お手紙の一言なりとも姫君の直筆でくださいというものが来ている。

それを見て源氏が、これはほんとうにあなたが返さなければならぬお歌ですと言って、幼い姫君に返歌を書かせる。「引き分れ 年は経れども鶯の 巣立ちし松の根を忘れぬや」、決して巣立ったウグイスである私は、お母さん（松の根）、巣立った松の根を忘れることがありましようか、という歌を贈答しています。

最後に一言だけ言うと、浮舟という宇治十帖のヒロインの姫君がありますが、匂宮と薫君の二人から求婚されて、二人が絶対自分のものにしてみせるというので、浮舟のもとにお互いのすきを見ては通ってきて、奪い合いをしているわけです。

それを見ていた侍女たちは、これも二派に分かれている。例えば、侍従という侍女は匂宮びいき、右近という侍女は薫君びいきで、二人でもって浮舟の耳にささやくんです。それから、お母さんはまた、こういうときこそ身をつつしんでくださいと、手紙をよこすんです。

じゃあ、お母さんはもっと親切に来てやったらいいではないかということ、お母さんはこのとき再婚してしまっていて、常陸介の妻になっている。その家のまま子が、赤ちゃんが生まれるので身動きができない。それで、娘に身をつつしめ、身をつつしめという手紙を出すんですけれども、浮舟はついにお母さんの言うことも、侍女の言うことも十分に聞けないところに追い込まれていきます。そして、宇治川に身を投げようと思ったが果たさず、木の根のところへ倒れていたのを救われるんです。

それはそうとして、浮舟のように二人の男から思われた女をどのように導くかということ、これはやはり母の常識と乳母の常識が強く運命を決めていくわけです。この場合は、それが不可能だった、非常に不幸な現実ということで終わっているわけです。

そんなふうにお母さんと娘というのは、家の風、家の栄えを左右する、大変大きなきずなだったということが言えると思います。

大急ぎのお話でしたけれども、ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

北村 今日のこの企画を担当いたしました読売新聞の北村と申します。皆さんにかわって、一つ二つ質問をしてよろしいということでお時間をいただきました。

お話を伺っていると、昔、結婚戦略というのが随分大事で、娘の振る舞いについてお母さんは随分力を持っていたということなんでしょうか。

馬場 そうですね、全くそのとおりです。上流階級になればなるほど結婚戦略は大変で、結婚してからもお母さんの力は、例えば女御同士の争いなんてなれば大変ですし、そうじゃなく

でも、親元の力が非常に大きかったと思います。それから、そこで生まれた息子でも、そのお母さんが出てきたときは反対ができないというくらい、お母さんの家刀自の権威は大きかったと思います。例えば、天皇家においても、実母の場合、皇太后の発言は非常に大きかったし、お席もちゃんとお母さんを上にしてお話ししたと思います。

年中いろいろと口やかましく、ガミガミ言っているわけではないんです。もうこれはというときしかお母さんは言わない。だからこそ、お母さんの力は大きかったんだと思います。

北村 そうすると、お母さんは指南役という感じがいたしますけれども、一方で娘はそれに反抗したりとか、お母さん、私は嫌よ、そんなお母さんの意見は聞かないわ、みたいなドラマはあったんでしょうか。

馬場 ないことはないですね。しかし、ほとんどないです。というのは、お母さんの発言はお父さんの発言も含んでいるわけです。逆に言えば、お母さんの意思をお父さんが言うこともあります。お父さんとお母さんは、位が上のほうになればなるほど、家があくまで中心ですから、もう合意しているわけですから、業平と高子后のように盗み出すという手しかない。そういうものだったんじゃないでしょうか。

北村 なるほど。そうすると、娘というのは多分、家にとっては家柄をかけた資産でもあった。

馬場 大きな財産ですね。美しければ美しいほど財産ということではないでしょうか。

北村 ありがとうございます。その辺、娘は母親にとって宝なのか、いつまでも手のかかる子どもなのか、そんなことも含めて後半戦に移りたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 では、舞台替えがございますので、少々お待ちくださいませ。

* * *

大変お待たせいたしました。では、パネリストの方々にご登壇いただきます。

まず、博報堂生活総合研究所顧問で、東京経済大学教授の関沢英彦さんです。(拍手)

昭和女子大学大学院助教授、松永しのぶさんです。(拍手)

同じく昭和女子大学女性文化研究所長・大学院教授の坂東眞理子さんです。(拍手)

コーディネーターは、読売新聞調査研究本部主任研究員の北村節子が務めさせていただきます。(拍手)

では、よろしく願いいたします。

北村 皆さん、馬場先生のお話を伺って、古代はこういう親娘関係だったんだなということを、いろいろ得心なさったと思います。

それでは、早速ですけれども、まず順番で一番奥、坂東先生、内閣府で初代の男女共同参画局長をお務めになったこともありまして、現代の女性が置かれている立場、母と娘をめぐる環境について、お話をいただければと思います。よろしくお願いします。

坂東 それでは、先ほどの馬場先生のお話の続きで、母と娘の関係というのは、今現在だけではなしに、どういうふうに変わってきたかを歴史的視点から簡単にお話しさせていただきます。

伝統的に日本は、おそらくヨーロッパとか、中近東とか、大陸、中国に比べて、非常に女性が強い社会だったのではないかと思います。天照大神、日本神話の最高神が女性であるとよく言われますが、『古事記』が成立した八世紀の初めごろは、『万葉集』の時代ですけれども、まだまだ女性たちが妻問婚で男性を迎えて、そこで生まれた子どもたちは妻、女性のほうの氏族、きょうだいとか親が育児を支えてくれた。

ところが、だんだん平安時代、あるいは階層によって少しずつ違いますけれども、通ってくるだけではなしに婿入り婚になって、そのうち同居婚になる。例えば、平安時代の道綱母というのは、道長のお父さんのナンバーツーかナンバースリーかの奥さんで、彼は一生、妻問婚なんです。藤原氏で大変栄えた道長になりますと、倫子という人とだんだん同居して行って、できのいい娘たちをたくさん持って、その娘が宮中で皇子たちを産み、その孫が天皇になったりという形になって、藤原家の繁栄をもたらすわけですけれども、だんだん同居婚になっていった。

それがさらに武士の時代になると、嫁入り婚、お嫁に行くことになっていきますし、さらには家父長制というんでしょうか、家の権力はトップの男性、父親、夫、長男、男性たちにどんどん伝えられていく。女性は幼いときは父親に従え、嫁してからは夫に従え、老いては

息子に従えと、女訓なんていうことが言われた。

侍ではない大阪商人ですとか、あるいは姉家督があった東北のほうの農民の人たちですとか、それぞれ違った家族形態ですけれども、侍の儒教的な家が明治期時代には一般的な倫理として、道徳として流布した。長幼の序が強調されましたし、家督相続が戦前制度化されていたわけですが、そういう伝統的な家族の中でも、お母さんたちといいますか女性たちは、実はとてもよく働いていたんです。

正確な統計はないのでわからないんですけれども、例えば1950年ごろでも、女性の労働力率は60%を上回っています。おそらく戦前は70%、80%。江戸時代はもっと働いていたのではないかと思うんですけれども、その働き方は、もちろん家族従業者として一生懸命働く、耐える、我慢する。一生、子どもをたくさん産んで、その子どもたちも十分には育たない。そういった母親を娘たちも、弱い立場でかわいそうだな、気の毒だななど。おそらく伝統家族の中での母娘関係というのは、弱者連合というか、弱い者同士がお互いにいたわり合ひましょう、支え合ひましょうという色彩が強かったのではないかと思います。

そうした伝統家族制が、戦後の民法改正とか、新しい憲法で法律上変わったわけですが、現実にはまだまだ残っていた。本当に変わるのが高度経済成長時代、1960年代、70年代にかけてです。それまで農村で家族従業者として働いていた人が、大都市近辺へ移ってきて、サラリーマンになって、結婚して、核家族を形成する。その核家族の夫は、サラリーマンになって雇われて働く。女性たちは、その妻として一手に家事だとか子育てだとか、場合によっては介護も引き受ける。

高度経済成長期家族モデルは、性別の役割分業が確立して、女性たちの働き方もM字型と言われます。若いとき、学校を出てからは働くけれども、結婚して子どもが生まれて一旦退職をする、そして子どもの手が離れてからもう一度働き出すという、M字型の労働力率の谷、Mの谷が一番深いのは、ちょうど昭和50年（1975年）ころで、女性の労働力率はもう45%ぐらいにまで落ちます。

その後、80年代後半、90年代あたりになりますと、高度経済成長型社会経済と違ってきて、成熟社会型モデルとでも言えばいいのでしょうか、終身雇用で最後まで保障されるという働き口は少なくなって、女性たちも働かなければならない。パートだけではなしに、キャリアで働こうという人も大変増えてきておりますし、少子化が、1989年が1.57ショックなんですけれども、大変深刻に進んでいきます。

一方で、日本の女性は世界一長寿というのがもう20年近く続いていますから、高齢化がどんどん進んでいく。

ですから、高度経済成長期の女性の生き方と、成熟社会になってからの女性の生き方は、かなり変わってきています。高度経済成長期にM字の谷を一番深くしたのは、団塊の世代、1940年代後半に生まれた女性たちですけれども、その人たちは、集中豪雨的に結婚適齢期に結婚して、20代後半に第二次ベビーブーム世代を産んで、その子どもたちの手が離れたら、年収103万円以下のパートで家計を補う。

そういった働き方をしたのが多くの団塊の世代ですけれども、成熟社会型モデル、90年代になりますと、かなり女性たちが高い教育を受けるようになっていきます。

母親と娘を教育で比べてみると、伝統家族型のころには女性は全然高等教育を受けられませんでした。中等教育が受けられたのもエリートの女性たち。それに対して、高度経済成長期は、大体みんな高校、あるいは短大くらいまで行ける女性が多くなりましたけれども、まだまだ四年制大学へ行く女性は少数派、10%そこそこだったのが、成熟社会、90年代になりますと、もうどんどん短大、大学へ進学をする。おばあさんよりも母親が、母親よりも娘が学歴が高い。男性たちもそうですけれども、そここのところは、母親と娘の関係を考えるときに一つの大きな差だと思います。

さらに、母野と娘が置かれた時代によって違うのは、結婚、出産です。1940年ごろの日本の女性の合計特殊出生率は4.3だったと言われていたんです。もっと前になりますと、与謝野晶子は11人産んでいますが、5人、6人も珍しくなかったんですけれども、大体戦前の女性たちは4人くらい、私も4人きょうだいで、末娘ですが、4人きょうだいというのは全然珍しくなかったんです。

高度経済成長期モデルの人たちは、平均2人です。その後、90年代になってからは、1.57

が今や1.29になっております。2人産まない、1人プラスアルファ、あるいは全然子どもを持たない人たちが増えてきています。

ですから、伝統家族のお母さんたちにとっては、母親であることが人生の大部分の期間を占めていた。しかし、それに対し成熟型家族の母親業の期間は短いもちろん死ぬまで、60歳と80歳になったって親子は親子ですけれども、人生の中で母親業に専念できる、母親業を表に出せる時期は相対的にとっても短くなってきている。

もう一つ、働き方です。家族従業者として、自分の名前でお給料をもらわない働き方が従来の女性の働き方。ものすごく働いていたんですよ。朝から晩まで、ほんとうに休む間もなく、昔の女性たちは働いていたんですけども、自分の名前報酬をもらうという働き方ではなかったんです。高度経済成長時代は、そういう労働から大分解放されたんですけども、サラリーマンの妻として、今度は出産、育児、あるいは家事も含めてですけれども、いろいろな無償の活動に専念をする。その後、子どもの手を離れてから、パートなんかで働く人が多いんですけども、なかなかそれだけで食べていけるだけの収入を持ってない女性が多かった。

90年代、成熟社会モデルになりますと、まだ少数ではあるんですけども、85年に雇用機会均等法ができるとか、女性の人生の中でキャリア、仕事の占める比重が大変大きくなってきています。

それでも、子どもを産んでキャリアと両立するのはとても大変だから、子どもを持たないという選択をする女性が増えるとか、あるいは子どもを持っているキャリアの女性を見ると、実は実家の母、実家のサポートが大変大きな役割を果たして、そうした新しい形の母と娘の関係が生まれてきています。

これがそのままずっと続いていくのかどうか。まだまだ日本の職場、日本の社会は、女性たちのキャリアをサポートする体制にないので、実家、自分たちの親族がサポートするところが多いんですけども、これをいかにして21世紀の新しい家族モデル、母親と娘の関係をつくっていくのかを、きょうのディスカッションで皆さんと話し合ってみたいと思っています。

北村 どうもありがとうございました。お話を伺っていると現代は、万葉から平安の昔とも、もう比べるのも変なくらい全然違ってきている。そうすると、母と娘の関係も決して永久不変のものではなくて、時代だとか社会構造によって随分違うんだらうということは想像がきます。

ここで、関沢先生にお話を伺いたいと思います。言ってみれば、そういった時代、時代の顔を追ってこられた専門家でいらっしゃいます。よろしくお願いします。

関沢 母と娘、その問題を取り上げたとき、どんなことをイメージしますかって、女子学生たちに聞いてみたんですけども、「友達以上親友未満」という答えがありました。それから、「あまり裸を見せ合いたくないけど親友です」とか、おもしろい答えもありました。

この近所だと、玉川高島屋などへ行くと、結構母娘がうろついていますよね。それから、銀座、新宿の伊勢丹なんかも多いです。最近、母娘消費とかいうことがよく言われるわけですが、それはなぜ起きたかという、既にお話しするように人口の高齢化があります。

1930年(昭和5年)ぐらいですと、女性は23歳で結婚します。平均値ですよ。26歳で最初の子を産む。産み終わりが、何と38歳ぐらいまで産んでいるわけです。そうすると、お母さんが50歳になっているときは、一番上の子はもう24歳で、女であればもう結婚してしまう。下の子はまだ12歳ですから、つまりお母さんと娘が友達になるなんていう期間はないわけです。母と娘だけです。今、お話しあったように、母である時間が短くなってくると、お母さんと子どもはもう親友、母と娘は親友であるということです。

例えば、27歳で産んだ娘が18歳になったとすると、お母さんは45歳。それから結婚するまでの10年間は親友で、大人の女同士のつき合いで、お父さんそっちのけでホテルの一階、ホテイチといいますが、そこでおいしいご飯を食べたりしているわけです。それで買い物をする。娘としてみれば、一緒に行けばちょっと高いブランド品も、「いいわよ、それ、私、買ってあげるから」とかいうことをちょっと期待している。勤め人であってもですよ。それが女友達の時期。

それで結婚します。結婚すると、今度は育児です。育児も、80年代の前半ぐらいまでは、

夫の母親がそれを手助けしておりました。でも、80年代後半以降になりますと、もう妻側の親が手助けをするようになる。

後半の介護につきましても、90年ごろは、東京都の調査だと、お嫁さんが介護しているほうが多数派であったのが、2000年の調査では、娘が実母などの介護をするほうが数値が多くなっているんです。つまり、家制度も全部壊れてくるわけです。そうすると、実家との関係が非常に強くなるわけです。

それで働き出します。私たちの研究所が1988年にやった調査ですと、結構おもしろいんですが、若夫婦でご主人の収入の6割以上を奥さんが稼いでいる場合、つまり均等で働いている場合、奥さん側の実家に資産があることが多い。つまり、私の好きなようにやらせてよという感じで強く出られるわけです。それから、何かあったらお母さんに見てもらおうからという形で強気に出られるということがあります。

お嫁さんが専業主婦、パートにも出ない完全な専業主婦になる場合は、夫の実家に資産がある場合が多い。お嫁さん側がそれをねらったのかもしれませんが、そういうことがありました。

ですから、現代でもやはり家のストック、資産というのは、娘夫婦に結構影響を与えるわけですけども、もう一つ、人口の高齢化でテーマになってきたのはその後半です。現在の日本では、女の人は86歳まで平均値で生きるわけです。男は79歳で死んでしまいます。7歳の差があります。

これはおもしろいんですが、今の時代になっても夫のほうが3歳年上という家庭が圧倒的なんです。これは変わらないんです。ということは、今日お集まりの方も、大体10年生き残ると考えていただければいい。だから、私も経験しますが、夫がここにいるにもかかわらず、この人死んじゃったら、あとは一緒に暮らそうねとか、女同士、何か話していますよね。(笑)

では、10年間生き残るわけですが、前半はいいけれども、後半の介護はだれがするのというと、娘がいれば娘がかなり負担する。だから、初期に育児は実家の母にほとんど助けてもらうんだけど、後半の10年、夫が亡くなった後、お母さんは10年生き残る。その10年間の面倒は、どちらかというと娘が見る。だから、五分五分であるということも言えますよね。

その中間のプロセス、その間ずっと現代のように成熟した社会で、お金、ゆとりがありますと、消費がすごくテーマになってきます。

きょう、お集まりの学生の皆さんが平均20歳とすれば、その10歳上、30歳の女性のお母さんは還暦前後ということになるでしょうけれども、今、還暦前後の人たち、女性陣、すごい元気ですよ。再開された場所にいらっしやると、東京駅前のオアゾだとか、汐留とか、そういう女性たちがいて、ホテルのフランスレストランのランチタイムもそういう人でいっぱいです。

私は、そういう彼女たちのことを、還暦なんだけれども元気ということで、還暦ギャル、略して「還ギャル」と呼んでいますけれども、この還ギャルの軍団がすごいです。ニューオータニの前でヨン様を追っかけて転んだりしているわけでしょう。追っかけなれてない。ましてや、20歳の人のお母さんといったらすごい若いわけですよ。だから一緒に買う。

さっきの還ギャルも、かつてを思うと、1970年ごろ若い女性だったわけです。その70年に『アンアン』という雑誌が創刊されて、1971年に『ノンノ』が創刊されています。つまり、女性のファッション誌、ライフスタイル誌が、そのころ生まれているわけです。今とほとんど同じ、もっと先鋭かもしれない、おしゃれなそういう動きがあったんです。その中で、彼女たちは今、60歳、あるいは50歳を迎えているわけです。つまり、ミーハーなんです。逆に、今の若い女性は、91年以降の不況の中で、どちらかというとお金がなくて、そんなふうにはうろろしないし、そんなにブームに乗っからないという形があります。

今、母と娘は、そうした中で何をしたいかということ、おしゃれ、何より旅ですね。旅、ショッピング、それからお茶をするなんていうことを一番好んでおります。

あなたは、「お父さんとお母さん、どちらを尊敬しますか」という調査をやっているんですが、20代の女性では、父を尊敬する人が28%、母を尊敬する人が70%であります。30代の女性、父・32%、母・68%です。20代の男性は、父・49%、母・51%で、母が勝っています。30代の男になりますと、さすがに父が勝つんですが、全体平均で2004年に初めて母側が父に

勝ちました。

バブル崩壊後の中で、お父さん、大変そうだけれども、うろちょろ、うろちょろしていて、何かおたおたしている、お母さん、どっしり構えているということなんでしょう。お父さん、大変なんですよ。その間に自殺率が上がった、いろいろ追い詰められている局面があるんですが、そういう意味で女性たちがすごく元気になっているシーンがあります。

温泉とか旅行業界は、今、大変です。女性の二人旅をねらおうと。昔の小津安二郎のころのように、お父さんと娘がたった一回、温泉に思い出にみたいじゃなくて、しょっちゅう行っているという感じでしょう。あそこはいいわよという形でやっています。

それから、学生たちに聞くと、共用小物というものを持っています。ジュエリーとか、ちょっと小物は借りていくわよという形で、両方が共用で借りている。場合によっては、Tシャツや上着も借りているということで、母、娘ではなく、姉、妹という感じがあるわけです。

そうした中で、ではすべてが万々歳かということ、結構いろいろな対立だとか気持ちの感情もあるんですが、少なくとも消費シーンにおいては、すごく仲のいい母、娘というのが今の状況です。

北村 ありがとうございます。言われてみると、確かに旅行に行った先などを見ると、団塊おばさんとその娘という組み合わせは大変多いように思います。時々、団塊娘がおばあちゃんを連れているのを見て、ああ、縦だな、縦の脈々とした女の流れだなということを感じます。

続いて、松永先生に、そういった母と娘の構造が時代的に随分変わってきたならば、おそらく母と娘の関係性をめぐる心理についても、いろいろな説がなされてきたと思うんですが、その辺を解説していただきたいと思います。

松永 皆様、こんにちは。昭和女子大学の松永と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は臨床心理士として、自閉症などの発達障害のあるお子さんたちや、そのご家族の心理的支援を長年行ってきました。そのような経験から、大学では臨床心理学や発達心理学などの科目を担当しています。そこで今日は、臨床心理学、発達心理学の研究の中で、母娘関係がどのようにとらえられてきたかを見ていくことで、このテーマの糸口を皆様と一緒に考えていきたいと思って来ました。

とは申しましても、実際に調べてみますと、母娘関係だけに焦点を当てた研究はそう多くはありません。親子関係の研究はたくさんあります。親子関係といっても実際にはその多くがイコール母子関係の研究です。親子といたら、母子のことなのですね。

これまでに、母子の特異的な関係を強調するような研究がたくさん行われてきました。ひっくり返って母子関係論などと呼ばれていますが、母子関係論というと、少し専門的な話になりますが、イギリスのボウルビィが唱えた「アタッチメント理論」というのが非常に有名です。日本語では「愛着理論」といいます。

愛着理論については、どんなに初歩的な発達心理学のテキストにも、必ずと言っていいほど記載されていますので、きょうお集まりの学生さんたちの中でも、心理学ですとか発達心理学を学ばれた方は、どこかで勉強なさってきたはずですよ。

このアタッチメント、愛着というのはどういう意味かと申しますと、乳幼児期の母子、母子の情緒的な強いきずなのことをいいます。

ボウルビィという人は、イギリスの精神科医で、1948年、第二次世界大戦直後、WHOから委託を受けて、戦争で両親と離ればなれになった各国の子どもたちの心身の発達について調査を行いました。

当時、子どもの専門家の間では、日本では「施設病」と訳されているんですけども、ホスピタリズムというのが大きな問題になっていました。ホスピタリズムというのは、乳児院とか当時の孤児院、現代では児童養護施設といいますが、そういった施設で長年生活した子どもたちに生じやすい、心身の発達のおくれや障害のことを指します。

ボウルビィは、自分が調査した子どもたちに、このホスピタリズムと同様の症状を確認し、その理由として、母親の不在が引き起こす発達上の問題であるとして、母性剥奪（マターナルデプリベーション）と呼び警鐘を鳴らしました。

乳幼児期における母親の不在が、その後の子どもの心身の発達に悪影響を及ぼすという見解だったのですが、ボウルビィの理論仮説は、フロイトによる精神分析理論の影響が大きい

とされています。精神分析学では、人生初期の母子関係を、将来の対人関係の源として非常に重要視します。ボウルビィ自身は、実際にはその後ほどなく、母親の不在が子どもの全人生に重大な影響を与えるというのは誇張し過ぎであったこと、彼が調査を行った子どもたちは、戦争でお母さんと引き離されたという非常に特異的で、かつ劣悪な環境下にあったということで、一般家庭の育児とは比較できないと訂正をしています。

ボウルビィの一連の研究自体は、乳幼児期の養育環境について大変示唆に富んだものですが、母性剥奪理論の功罪については、欧米では批判的な検証がかなり早くから行われ、その結果、産みの母親でなくても、親密な少数の養育者との間に、愛着が形成されていることが子どもの心身の発達に大切であるということが、実証的に明らかになりました。

ホスピタリズム自体も、施設生活が原因なのではなく、施設の養育体制に問題があるということが明らかになってきて、養育スタッフとの温かい個人的な接触や、スキンシップなどが豊富にあるように養護体制を改善することで、施設でのかつてあったホスピタリズム現象が減少していきました。

母性剥奪理論に対する批判的研究は、日本でも随分前から一部では行われているんですけども、なぜかあまり広くは広まっていかなかったように感じます。

日本に限らず、このような学説が、研究者本人の研究意図や背景をきちんと伝えることなく、世の中で恣意的に援用されたり、誤った形で重用されるということが多々あるような気がします。人生初期の母子関係の重要性が強調され過ぎ、育児における母親の責任が強化されていった側面があるのではないかと思います。

世間では今でも、例えば不登校や非行などの子どもの心理的不適応は、母親の養育態度や、パーソナリティーの問題と思われがちです。また、いわゆる母性神話であるとか、三歳神話—三歳まではお母さんの手で育てないと—という言説が、世の中のお母さんたちの心理的プレッシャーとなっていることもあると思います。

私の専門分野でいいますと、自閉症という障害は、今では生まれながらの脳機能の障害ということが明らかになっていますが、今から2、30年くらい前までは、自閉症のお母様方は二重の重圧を負っていました。一つは、子どもに障害があるということですが、母親にとっては、それだけで十分に大きいストレスなわけですが、それに加えて専門家からも、子どもの障害の原因が母親の養育態度やパーソナリティーにあるとの指摘がされて、実際にそのような指導がされていた時期もあるわけです。

一人一人の研究者にそのような意図がなかったにせよ、これまでの心理学研究の一部には、結果として「母親を家に引きとめる心理学」という一面があったことは否めません。ちなみに、これは私の言葉ではなくてスカーという人の言葉です。

最近では、これまでの母子関係の研究について、新しい視点で活発な議論が行われています。そして、親子関係や母子関係と子どもの発達とは、単純な因果関係にはないということが明らかになってきています。

また、親子研究における父親不在ということもよく指摘されることです。最近では、父子関係であるとか、母性に対する父性研究なども行われるようになってきています。

このような流れの中で、現代の発達心理学研究には二つの重要な視点があります。一つは、人間の行動様式や心理とか発達とは、発達初期に運命論的に決まるわけではなくて、その後の人生のさまざまな体験や人間関係の中で、成人期以降、そして老年期以降も成熟、発達していくという生涯発達、生涯発達心理学ともいいますが、そういう生涯発達の視点。

もう一つは、人間の行動や心理、発達は、生物学的な基礎からくる個体差があると同時に、社会や歴史、文化的環境から絶えず影響を受けているということです。言い換えれば、坂東先生、関沢先生のお話にあったように、時代や社会の価値観が変われば、その中で生きる人間の心理や、発達様相も変わってくるということです。

母娘とは直接関係のない長い前振りになってしまいましたが、母娘関係の心理的構造を考えていく際にも、社会的、歴史的な視点が必要であるということと、当たり前のように受けとめられている、例えば「母性」のような概念も、当たり前とは限らないという視点を知っていただきたいと思いました。

現代社会の中での母娘関係はどういう特徴を持っているのかということですが、これはこれまでの先生方のお話にありましたように、一生の長さが長くなったということで、親子関

係で見ると青年期以降の親子関係が長期化しているということです。母娘関係は、これまでにない長期に及ぶ関係となっています。人生の長さからいっても、今までのように女性の一生がイコール母親の一生では済まなくなってきました。

発達心理学の研究でも、母娘の心理的きずなの強さがいろいろ示唆されています。実際に、母娘関係の親密さは、関沢先生のお話とも関連しますが、母息子関係だとか、母夫関係よりも強いという研究のデータもあります。

このような母娘の親密な関係には、お互いにとってプラスの影響となる関係と、マイナスの関係とがあるように思われます。プラスの関係とは、これまでのお話の中にもありましたように、母娘双方が互いを理解して、支え合っていることを実感できているときですとか、娘の結婚や出産によって、母娘の連帯感や共感が強まるといったような関係ですね。

実際に、「自分の子どもの面倒を見て欲しい人」として娘が選ぶのは、自分の母親が一番多いです。それから、お母さんが娘の子ども、孫と頻繁にかかわる中で、核家族の中で閉塞しがちな娘親子の心理的緩衝役になっている場合も多いようです。また、お母さんが職業を継続している場合には、娘の職業と家庭両立のよい役割モデルとなっていることも多いようです。

一方で、このような母娘関係が濃密過ぎる場合には、母娘双方の心理的健康や発達にマイナスとなる場合もあります。一卵性母娘と言ったりしますがけれども、こういった言い方にはそのようなニュアンスが含まれていると思います。非常に強過ぎるお母さんの磁場から離れられない娘と、その娘をうまく手離せないお母さんといったような関係です。

それでも、両者のバランスが保たれているうちは、楽しくショッピングをしたり、おしゃべりをしたり、よい関係でいられるのですが、一旦バランスが崩れたときに、どちらかが心理的不適応に陥りやすくなります。

例えば、いつまでも若々しくて美しいお母さんと仲よし親子でそれがずっと続くと思ってきた娘が、自分の母親が、だんだん老いていく現実を受容することができず、うつ状態になるといったケースですとか、お母さん自身が自分の人生選択に納得感を持ってない状態で、娘に自分の欲求を投影したり、娘のキャリア選択に過剰な期待とか抑圧をする場合にも、娘の健全な自立、発達は阻害されやすいと言えます。

このような母娘関係を、お互いの心理的発達にとってプラスの関係に発展させていくためにはどうしたらいいかということですが、私自身はいくつかのキーワードとして、自立と共生、連帯ということが頭に浮かんでいます。この辺については、また後半部分で触れられたらと思っています。

北村 ありがとうございます。

とても忙しい中で、ぎっしりしたお話が並んだので、皆さん今、いっぱいかもしれませんけれども、どうも私の理解したところでは、母と娘の関係というのは実は時代によって大きく変わってきている。特に今は、戦後、高度経済成長が終わって、世界のありようが変わってきているから、その変化が、今、実際に生きているお母さんと私の間でも違うんだということ。そのことについては、いろいろな心理的な解説が行われてきているんだけど、その心理的解説も、私たちが通常思い込んでいるのとは違う新しい所見が次々に出ていて、こうだからあなのよと決めつけるわけにはいかないらしいということ。そんなことを前半で学習したように思います。

それでは、これから休憩をとらせていただいて、後半は、各先生方に自由にお話しいただきます。

(休 憩)

北村 慌ただしい休憩で失礼いたしました。時間が押しているのも、どんどん進めたいと思います。

幾つか会場の方から質問をいただきました。おそらくご自身の母と娘の関係を真摯に考えておられるんだと思います。一つ、これは51歳の主婦の方からです。お母様が84歳で、お嬢さんが26歳だそうです。

「聞くところによると、母親は娘より幸せでありたいという心理があるそうです」、深い

ところではそういうところがあるのかもしれませんがね。「娘より自分のほうが少し上でいたいということで、娘が自分より上になりそうになると不安になって、娘の足を引っ張るような行動をとったりすることがあるんだそうですが、ほんとうなんでしょうか。私は、娘には自分以上に幸せになってほしいと思っているんですが、母との関係で、そんなことあるのかしらと自分も感じるときがあります」。

どうでしょう、心理学のお立場からとか、あるいは最近は、母親が経験したことのない職業経験を娘がするとか、収入を手にするということもありまして、就業構造とも問題がありそうです。こんなところをヒントに、まず三人で話していただけていますか。

では、口火を関沢先生から切っていただけますでしょうか。

関沢 母じゃないのでよくわからないんですが、松田聖子とSAYAKAともめていますけれども、『白雪姫』というグリム童話がございますよね。あれ、初版本は実の母なんです。実の母が鏡を見て、「私よりきれいなのはだれ？」と言って、娘、白雪姫のほうが美しいということで、それに嫉妬してなんです。私が最高でなくちゃ嫌だと。初版ですと、最後、娘側が外に追放されたりするだけけれども、凱旋してきて、母に熱く火で燃えた鉄の靴を履かせて、燃えている火の中を歩かせる、そして焼き殺すという話なんです。つまり、母殺しの話でもある。

これは民話からグリム兄弟が掘り起こしたものですから、明らかに魔女裁判とか、魔女のヨーロッパの伝統を踏まえているわけだけれども、心理的な深いところでは、やはりある種のライバルであるという部分が、無意識の部分ではあるのかなと思います。

坂東 私はその話を聞いていると、白雪姫の童話もそうですけれども、対立とかライバルとして母と娘を見るというのは、ちょっと日本の文化圏では少ないのではないか、古いお母さんたち、古い世代の女性たちは、自分たちが持てなかった可能性を次の世代の娘たちが持つことを、むしろ喜んでくれていたと思うんです。

関沢 もちろんそれはそうですね。

坂東 私はできなかったけれども、娘にはやってほしいという前の世代のお母さんたちが応援してくれた。今後、豊かになってから、自分もある程度自負心がある生き方をしてきた世代の女性が、新しい若い女性たちに対してライバル心を持つというのは、ある得るかもしれません。

関沢 もちろん、日常の中で常にライバルなわけではなくて、ライバルである部分が心の深層意識のどこかにある、ということを知っていることが大事なんじゃないかな。もちろん、それが現実になるものではないですよ。

松永 心理学の立場から言うと、今のグリム童話ですとか神話の中の物語のモチーフ、例えば、ギリシャ神話とか日本の神話の英雄が怪獣を退治して自立していくというようなテーマを人間の心理発達に応用して考えるというようなことをユングなどが行っています。しかし、私としては、そのような考え方は、21世紀の現代に生きている親子の関係や、実際に今の社会に不応答を起こしている方々の心理的な支援を考えていくときに、あまり役に立たないのではないかなと思います。文学とか神話の解釈学としては非常に興味深いところがあるのですが、それをそのまま今の人間の心理発達や親子関係に、当てはめることで、本当はないようなこともあるというように思えて、かえって、深刻に考え過ぎてしまうことがあると思います。

関沢 最近は、そうですね、アメリカで問題になっていますけれども、小さいときにこういう害を受けたとか、もういい大人になった人が言うわけです。だから、文化を知るとき、例えばベルイマンという映画監督の「秋のソナタ」というのがありますが、もういい大人の娘が母親を責め立てていく映画で、何かヨーロッパ、アメリカには、そういう一つの映画の伝統といえましょうか、あるかもしれませんね。

母と娘の対立という意味では、作家の中沢けいさんの『海を感じる時』という、18歳かなんかで書いたデビュー作も、ある種母との対立。今、文芸で、中学生でデビューした人も、これは実の母ではないけれども、「あの女」と書いてありますが、「あの女」とのキッチンでの対決が中心ですね。14歳で文芸賞を受賞したんです。その人の文章はすごい文章ですが、それもやはり母との、育ての母というか、「父の女」と書いてありますが、その対立関係でしたね。だから、どこかにはあるだけけれども、もちろん現実そのものではない。

北村 母と娘、現代だと随分、実際にめぐって自分自身の人生であるとか、受け取ってきた社会環境も違うでしょうね。そうすると、今、高校以上の進学率、女性の場合は約50%に達しているわけですが、先ほど坂東先生のお話では、その前の世代はとてそんなふうに行けなかった。そうすると、同じ青春期でも、母と娘は随分違う経験をしていることになりませぬ。その後の就業もそうです。

坂東 例えば、昭和30年の女性の短大と四年制大学進学率、合わせて5%です。今の10分の1だったわけです。その前の世代になると、女学校へ行くのが、それこそ地方だと村に1人という感じだった。私が受けられなかったものを娘にという、やはり母親の愛情が、次の世代の女性たちの教育水準をとて高めてきたのではないかと思うんです。

男女別で意識調査をすると、特に父親の場合には、男の子には大学以上の教育を受けさせたいというのが多いんですけども、女の子には、高卒でいいとか、あまり教育は要らないという考え方をしている、母親のほうが自分の好きなだけ、娘の希望に沿いたいというのが多いんです。

代理役割を娘に期待するというのは、少なくなるかもしれませんがね。それは過去、高度成長してくるとき、母よりも娘が、娘よりも孫がという時代と同じレベルに立つ時代とは、お互いの関係が違ってくるんじゃないですか。

北村 そうすると、今の母親たちは、娘は私とは違う人生を歩むであろう、それはより高学歴な社会になるだろう、その中で生きていくだろうという認識はできているわけですね。そうなってくると、母のそれは期待でもあるんだけど、もしかしたら教育ママになるかもしれないし、娘が期待から外れてしまったら、母と娘は不幸な関係になるのではないかと、いう心配も出てきませんか。そんなことってないんでしょうか。

関沢 あるでしょうね。学生たちは、母に頑張れと言われて、ずっと頑張って、大学受験も男に伍して頑張って、就職の時点で、まだ差別があるではないかという感じを受けながら、それを乗り越えて、そして仕事を始めて本気で頑張る。本気で頑張れば頑張るほど、今度は母が逆に心配し出す。ずっとそのままいっちゃうわけ？ どうするの？ というあたり、こら辺が微妙なんです。期待感と同時に心配もある。

ところで、今申し上げたことと逆が出ていまして、それは最近話題になっています階層分化ということですが、今までの日本は、戦後は特にそうですが、子どもの世代のほうが親よりもいい生活を必ずできていたんです。それが、この90年代のバブル崩壊の不況の中で、あるいは今後もそうですが、我々とか皆さん親世代より子のほうが、もしかすると生活水準が下がるわけです。アメリカも一時期そういう時期を迎えたわけだし、ヨーロッパも迎えました。

階層という概念もすごく難しいです。安定した社会的地位という点についても、昔は生活水準があるレベル以上の人と結婚すれば成立したんですが、それもかなわないかもしれない。そして、もしかしたらフリーター、ないしは家に引きこもってしまうかもしれない。そうすると、どうなるだろうという不安感を常に抱えていて、そこが新しい形の葛藤、つまり子どものほうがもしかしたら支えてやらない限り落ちていくかもしれない。それをどうすればいいだろうかという迷いがすごく出ていると思います。これは父、母ともに。

松永 確かに、親世代と子ども世代で比較した時、今後、私の世代ですと、ひょっとしたら親と同じくらいの経済力を維持できないかもしれない。特に老後の年金などはそう思います。

もっと若い皆さんたちの世代だと、今、ニートとかフリーターが非常に大きな問題になっていて、それ自体が、それこそ若者個人の心理的な弱さという形で論じられることもあるのですが、実際には若者自身も今の世の中に出ても、自分の働き場所はないとどこかで自覚しているのではないのでしょうか。

一方で、仕事に対する高い欲求もあり、満足できるような仕事がなかなか見つからないという面もあるかもしれません。それから、やはり親に経済力があると、親元で生活し続けたいという側面はあっても、何となく依存関係が長引きやすいという側面はあるかもしれません。

坂東 「母と娘 ―葛藤・自立・継承―」という題ですけども、「葛藤」というのを考えたときに、日本の場合は、いつまでも母親が子離れしないといえますか、ずっといろいろな形で抱え込もうとする。子どもの自立、娘の自立をあまりハッピーだと思わないで、ほんとうにずっと一体化しようとする依存型、ズルズル型ベタベタ型の葛藤というか、そういうことが多い。

アメリカだと対立型の葛藤というのか、自立した、強い個人と個人のぶつかり合いとか、ライバルという色彩がある。それに対して、もう面倒くさいわよ、うるさいわよという感じの葛藤があるような気がするんです。

例えば高度経済成長時代ぐらいですと、娘の夫とか娘が、経済的な面でも社会的な面でも親と乗り越えていくことによって、その関係が離れていく。親からの影響力が弱くなる、親を乗り越えることが可能だったろうと思うんですけども、これからは、なかなか若い世代が親を乗り越えて自立をしていくというところが難しくなってきた、ズルズルべったり型の葛藤が延々と続くのではないかと、というおそれは感じますよね。

関沢 そうですね。1991年に24歳で死んだ安藤美保という歌をつくる人がいたんです。その人が母についてこんなことを書いています。「木材でしきられた空間を住み処とし 母は手長き蜘蛛に似ている」、日本建築の中において、何か手が伸びてくる。この人は、ほほのあたりがお母さんに似てきたと言われてしまったので、『万葉集』の講義もうつろになってしまったという歌も詠んでいます。母との関係が微妙に嫌なんですよ。これは24歳で亡くなっているから、ある年代のことで、もうちょっと長く生きておられたら変わったのかもしれないけれども、やはり娘側にはこの時期はあるわけですよ。

北村 読売新聞では、ご存じかもしれませんが、「人生案内」というコラムがありまして、読者の方からいろいろな質問が寄せられます。母と娘に関するものを幾つか拾い出してみたいんですが、これは今年5月にあった大変興味深い質問であります。

「30代のパート、結婚3年目です。私は異常なくらい実母と仲良しで、結婚後も夫を置いて9回も一緒に旅行に行っています。電話も毎日、週に1回は実家に行っています。夫は三男なので、私の両親の面倒も見たいと言ってきて、将来は二世帯住宅を建てる予定です。あまりに仲がいいので、弟や友達から『お互いが自立していない』と指摘されてきました。夫のことはもちろん大切ですし、実家に帰った日も夕方には家に戻るようにしています。両親とも60代で最期は私が見とってあげたいと思うのですが、死後、自分が前向きに生きていけるのか今から不安です。夫も私と母が親友のようなので心配だと言っています。今は私たち夫婦と両親の4人で行く温泉旅行が至福の時です」という質問です。

これに対して、大学教授の大日向雅美さんという、母子関係などについて大変詳しい方が答えているのが、「こんなに幸せとと思っている人が、何を悩んでご相談かと思えます」、そりゃそのとおりだという感じなんです、「多分あなたは今の生活が幸せ過ぎて、いつ壊れるかと思うと不安なんじゃないかな。いつまでも親離れ、子離れをしないあなた方親子を前にして、仲がよ過ぎて心配だという夫の胸中を考えたことがありますか」と言っているんです。

今、経済がだんだん成熟期に入って、もしかしたら右肩下がりがみということで、むしろ子どもの世代が親の世代に寄りかかる傾向が強い。そういうことが確認されるお話、多々あったと思うんですが、その中で、夫や父親の居場所がどうなっているのか、ちょっと気になるところもありますね。母と娘のきずなが強くて、しかも母が娘をサポートするという色合いが強ければ強いほど、あれ、夫はどこだ、父親はどこだという心配もあるんですが、この辺はいかがでしょうか。

関沢 一卵性母娘なんていうことが言われたり、息子の場合は母子癒着が言われたりするわけですが、やはり父親の不在ということは、精神医学者が言うほどの大問題という言い方で考えなくてもいいと思いますが、そこに気配がないというのは少し問題かもしれないと思います。

こちら辺の問題にかかわってくると、日本の企業社会のあり方といえましょうか、長時間労働ですよ。不況のもとで、正規社員を増やさずに、余計に長時間労働になっています。今や、若い女性や男性はみんなそこに繰り込まれているわけで、そうした中で少子化、赤ちゃんが生まれないことが問題になっていますけれども、まず結婚するといっても時間がないじゃないか。もっと年をとってからは、母親も最近はどうですが、父親は時間を全部取られて、夜、なかなか帰れない。

しかし、実際にデータで見ますと、家族そろって夕食するというのにイエスと言っている人は、世の中で今、9割いて、平均4回はお父さんも含めて食べてはいます。父親が娘もしくは息子と、面と向かって人と人で会話をしているかというあたりが、結構寂しいかなど。照れてしまうんです。でも、母と娘は、今、インターネットのメールで、80%の人は母とメー

ルしています。息子もかなりしています。父親としているのは5割ぐらいです。やはり母と電子機器を使ってもつながっている。父がもう少し関与する必要はあるとは思いますがね。

坂東 先ほど馬場先生のお話でも出ていましたけれども、昔の女性、子どもを産むというのは家にとっても大事な役割だったんです。例えば、天皇家、だれが跡継ぎをするかなんていうのも、母親の出身、母親のステータスが後継者かどうかによろしく影響した。

それに比べると、例えば徳川幕府なんていうのには、吉宗のお母さんはおふろ場の係だったとか、母親のステータスは全く無関係で選ばれる。平安時代は、いい娘を育てることは父親にも大事な仕事だったんですけれども、残念なことに今のサラリーマン社会では、男性たちにとっては、コミットの対象が家族ではなくて会社、働く場になった。長時間労働で、週休1日、私どもずっと土曜日は働くということでやってきたわけですがけれども、高度経済成長時代の男性たちは嬉々として働いていたんです。

そして、長時間労働だけではなく、仕事が終わってからも、男同士の話ですごく盛り上がり、一番尊敬する人も、一番自分のことをよく理解してくれる人も、男同士の中で求めている、妻だとか家族は二の次、三の次というのが、高度経済成長時代の男性だったのではないかという気がするんです。

それが成熟社会時代になってきて、これからの21世紀は、男性たちがもう一度、職場は頼りにならないといえますか、最後まで面倒見てくれる終身雇用の相手先ではないというときに、やはり家族の比重がとて大きくなっていくのではないかという気がします。そのかわり、仲が悪くてなると耐えられなくなるとか、反作用もあるかもしれません。

昔は、奥さん、あるいは娘とかかわりが少なかったから、少しぐらい仲が悪くても離婚しなくて済んだんだけど、これからはなかなか厳しくなるかもしれません。

松永 今、坂東先生がおっしゃったことは、確かにそうだと思うのですが、今の若い女性、男性もそうですけれども、実際には皆さんたちのような高学歴の女性の結婚難というか、うちの娘は30歳になっても結婚しないと、親御さんがすごく心配されているケースも多いと思います。お嬢様のほうも決して結婚したくないわけではなく、したいと思っているんだけど、適当な人がいない。

適当な人ってどういう人かということ、皆さんのような高学歴、大学まで学業を修めて、自分の仕事に就いて、親元もある程度裕福であれば、お母さんと二子玉川にショッピングというような女性は、自分が実家族で育ててきたライフスタイルをそのまま維持していきたいというお気持ちは強いと思います。

また、そのような表層的な部分だけではなく、人間としての自分の生き方、社会の中で何か活躍の場を持ちたい、という生き方を理解してくれるような男性となかなかめぐり合えない、という側面もあるのかなと思ったりしています。

今、関沢先生のお話を聞いて、決して今のお父さんたちが家庭を顧みていないわけではないということで安心したのですが、一方、育児不安をすごく強く抱えていらっしゃる専業主婦のお母さんのリサーチからは、育児不安を持ちやすい一つの要因として夫とのきずなが薄いということがあげられています。

夫との共通の話題が少なかったり、共に考える課題が少ない人のほうが、育児不安が高いという結果があります。夫との関係性はとても大切だと思います。でもお父さんだけを責めても始まらないわけで、もっと社会全体で、一人一人の家族が時間的・気持ちの上でもゆとりを持って生活していけるようなシステムづくりも大事かと思えます。

関沢 お父さんを責めてもしようがないのではなく、私は責めていいと思うんです。第一子ができたときに、すごい必死で育てているときに、ねえ、ちょっとこっちを向いてよと奥さんからシグナルが出ているんです。その段階で、男は忙しい、忙しいと言って逃げるわけです。

それで女性はどうするか。いいわよ、私、頑張るわよといって、もう当てにしないわけです。それがずうっと尾を引いて行って、還暦間近になって、夫が、定年だからそろそろ一緒に遊ぼうよと言っても、奥様は、女友達がいるんだから嫌よということになるわけです。離婚まで行かなくても、そういうプロセスがあります。

それはいろいろインタビューしていくとありまして、やはり最初の段階において、全く男側が家事も手伝わない。我々の調査だと、手伝いというのは、男たち、ごみを出していますよと言うだけなのです。だから、やはりこの状況は少し変えないといけない。ただ、おっしゃ

るように、仕事がものすごく忙しいというのはあります。今、30代は、バブル崩壊後、特に強くなっています。

私などは思うんですが、これから消費が回復してきた中で、もう一回、一つの社会変化を起こすためには、長期休暇制度を入れて、親と子どもが時間を持てるようにすることが大切です。給料は下げてもいいです。そうすると、別荘とか持ちます。家は2軒が増えて、人口が減っても冷蔵庫はもう1台売れるわけです。そうした中で、日本の国土の7割の山地も手入れをする。そうすれば、口を聞かなかった中学生の息子が父親と口を聞くとか、そういうこともあるわけです。キャンプをやってみるとか。

2週間から4週間、できればそういうことがあると、高齢化社会では、定年後の永遠に続く休暇の予行演習にもなるわけで、そういう意味では少し新しい社会モデルを、時間を軸に考え直すということもあると思うんです。ちょっと話が大きくなりました。

松永 今のお話の中で、家事もできない夫の話が出てきましたが、その夫を育てたのは母なんですね。高度経済成長期時代の専業主婦である母親が、自分の息子をそのように再生産していったわけです。ただ、それはその時代の要請に合っていました。しかし、若い皆さんたちがこれから子育てをなさる際には、是非身の回りのことは自分でできるような人に育ててあげて欲しいと思います。それは男、女にかかわらずです。大人になって自分で食事もつけないという状態ですと、ほんとうに困ってしまいますから。

坂東 松永さんが、高学歴の女性はなかなか適当な相手がなくて結婚できないという話をなさいましたけれども、統計で見ると、一番結婚できないのは男性なんです。男性の40代後半で、約15%が未婚です。男性の生涯未婚率が10%になんなんとしていますから、ぜひ将来的に自分で生活のことができる、ちゃんと家庭でも、妻にも、娘にも、息子にも関わられるように、自分の息子を育てることが大切です。

松永 ただ、結婚してもしなくても、自分の身の回りのことは自分でできるというスキルがないと、これからの時代、生きていくのは大変かなと思います。逆に、スキルがあれば、いろいろな人という仲間関係ができていって、楽しみも広がるのかなと思います。

北村 結婚という話が出ましたけれども、結婚に関しても、つい娘は母をモデルにして、母のような結婚をしたいと考えたり、ああいうのは嫌だと、そこに基準を置いてしまうわけですが、また人生案内、ご参考までにご紹介させていただきたいと思います。

これは昨年6月ですけども、「アルバイトをしている25歳の女性です。そろそろ結婚したほうがよいと思い、結婚相談所に入会しました。おつき合いの声は何度となくかかってくるのですが、いざ結婚を考えると『自分の自由な時間はほとんどなくなる』『家事、育児、介護に追われるだけの人生になってしまう』という思いが頭に浮かんできます。結婚するのがとても怖いのです。母は、私が小さいころから『結婚したら我慢ばかりなのよ』『結婚したって、自分の収入がないからおもしろくないわ』と愚痴をこぼしていたので、そのことが頭にこびりついているのかもしれない。しかし、今のアルバイトがこのままでいいとは思えず、年齢を考えると焦ってしまいます。精神的に限界です」というんですが、ここにいる先生方としたらどんなアドバイスをなさいますか。

坂東 焦ることはないですよというのが絶対正しい答えだと思うんです。結婚を考えるときに、自分の親と比較する、親がとても幸せだったら、ああ、私もとなる人と、とてもあんなに幸せに結婚するには、私のお父さんほどすてきな若い男性にはなかなかめぐり合えないのではないかしら、とっておいてしまおうとか、一つの状況でも本人によって対応は全然違うんです。

だから、ぜひプラス思考で、もし親が幸せだったら、もっと幸せになるように頑張りなさいとか、逆に両親の結婚があまり幸せでなかったら、あなたはまた別の人生があるんだからと力づけてあげることが必要だと思うんですけども、その女性の場合は、具体的にはやはりちゃんとした自分の人生、キャリアが見えないところが一番の不安だろうと思います。28歳では遅過ぎる、もう10年前からそのつもりで、しっかり自分のキャリアデザインをしていればいいのと言いたいですね。不安がらないで、一日一日を大事にいきましょうと回答するのではないのでしょうか。

松永 大変前向きな回答だと思うのですが、実際にめぐり合えればそれでよかったですと思いますが、結婚というのは職業選択と大分違って、昔から言われるようにやはり縁という部分も大

きいと思います。

学校の勉強とか、仕事を探すとか、仕事でのキャリアを蓄積するというのは、ある程度個人の努力によるところも大きいのですが、結婚は望んでいても努力では補えない縁という面もあります。結婚しなければ幸せな人生が歩めないという強い固定観念にとらわれ過ぎると、かえって自分を狭めてしまうという気がします。結婚したいという気持ちは大事に持ちつつ、まずは自分の足で立つというか、そんなに大変に考えることはないんです。できることから、自分で選んでやっていくということから始められるとよいと思います。

お母さんは大変だったのかもしれませんが、自分はお母さんとは違うのだから、お母さんとはまた違う人生を自分でつくるという心構えが欲しいと思います。

北村 ご回答ありがとうございます。確かに「人生案内」等を見ていると、母を基準にして自分の生き方を考えてしまう娘世代が結構多い。あと一つ、これは娘側から寄せられる質問に多いんですが、母がいつまでも私に構い過ぎて困るというのが実はたくさんあるんです。

例えば、「31歳の会社員です。近くに住む実母が異常なほど育児に口出しをするので困っています。一歳六カ月になる娘は、子どもの発達がゆっくりぎみなのですが、母は何度も電話してきて、あなたの育て方が悪いから言葉が遅い、会社をやめ育児に専念しなさいと言う」なんていうのがあります。

もう一つ簡単に紹介しますと、「20代の会社員です。実家の両親は昔から干渉が激しかったのですが、ますます結婚後ひどくなりまして、毎日のように電話してきて、用事で留守にしていると、『どこに出かけていたのか。だれと会ったのか』と聞く。私が用事でいないときは、合鍵で勝手に家に入り、掃除をしたり、布団を干したりする。『もう結婚しているんだからやめてくれ、電話も用のあるときだけにして』と言うと、泣きながら、『あんたがかわいいから、あんたが疲れていると思ってやっているのだ。今まで一生懸命に育ててきたのに、こんな仕打ちを受けるなんて』と言って、私が申しわけない気持ちになってしまう」というんですね。

これってある意味で愛情だと思うんですが、どういうふうにご覧になりますか。私たちは、つい愛情というお砂糖をまぶされると、何をしてもいい、何をされても許さなくてはいけないような心理に陥るところがあるんですが、その辺、日本的な母と娘の関係の特徴かもしれませんが、先生方はどんなふうにごらんになりますか。関沢先生はどうごらんになりますか。

関沢 心理学の立場から、共依存の問題をお話いただくのが一番いいと思うんですが、要するにともに依存しあっている。頼られてしまうこと自体、嫌だ嫌だと言いつつ、どこかに依存しているということがあって、お母さん側も構って、構って、構うということの中においてその人自身が生きている、人生があるみたいなのがあるって、なかなか難しいですよ。

でも、私の意見では、さっきの結婚相手がなかなかいない話と、今の話と両方、今の時代の問題としてあると思うんです。イエスということとノーということが、なかなか難しい。つまり、イエスということは、チャンスが目の前を通ったときに、そうなんだとぼっとチャンスをつかむわけですが、今の若い人はすごく下手です。ほら、今、君の前をチャンスが通っているじゃないか、結婚相手を通っているじゃないかというのが、意外にわかっていない。それをつかめば結婚できるのに、選択が多いので、しない、迷う。

ノーのほうも、どうあってもノーと言えればいいのに、言えないみたいなのがあると思いますけれども、心理学ではいかがでしょうか。

松永 今の共依存、いわゆるアダルトチルドレンと言われる問題ですけども、アダルトチルドレンは疾患名ではなくて、もともと今おっしゃったように、アルコール依存症を持つ家族は、家族としての機能不全を起こしやすく、そのような機能不全の家族のもとで育った子どもたちに、いろいろな心理的な不適応が起こってきやすい概念なんです。それが拡大して、アルコール依存症の家族でなくても、機能不全に陥っている家族で育ったから私はこうなってしまったというような意味で、「私はアダルトチルドレン」という、自称アダルトチルドレンが増えているような気がします。

しかし、子どもにとっては親はいつまでたっても親であり、その親からの愛情というか、言動というのは、子どもにとってはいつまでたっても親からの言葉、働きかけであって、それを拒絶したり拒否するというのは、子ども側からすると非常に難しいことです。お母さん

は、自分のことを思ってやってくれていると思うほど、一層難しいと思います。

そのようなときのアドバイスとしては、現実的には、親自身の価値観とか生き方を変えていくのはなかなか難しいところがあります。むしろ、若い娘さん、あるいは息子さん自身が、一時的にはつらいけれども、まず親元を離れるとか、お母さんのことを少し離れた目で見る、客観的に見ることをサポートしていくと思います。

それから、そのような方というのは非常に自尊感情が低くなっていることが多いんです。自分なんか何をやってもだめだと思いがちです。できるだけサポートしながら、ほんの小さなことからいいので、自分でできることだとか、お母さん以外の人とのつながりで、自分の役割を持っていくということを支持していくことがあります。

北村 お話を伺っていると、娘の自立として、進学があるし、就職があるし、恋愛があるし、結婚があるし、そして娘の出産、子育てというのがあるんだけれども、どうも娘側でも当てる心理はある、親側でも、少子化のせいもあるのでしょうか、いつまでも、いつまでも娘にかかわってほしいという心理もある。それが、過度の依存にならないようにするには、どうも今の話の流れですと、横の関係、つまり母親にとっての夫、それから娘側にとっての恋人、夫という、男の人がもうちょっと頑張ってきてほしいということのようです。

それから、母と娘では時代が違うから、過ごすべき青春の時代も違うし、おそらく就業の機会も娘のほうがずっと増えているであろう。振る舞いは違ってくるんだけれども、おそらく励まし合うという深いつき合いというのは、平安や万葉のころから変わっていないのではないかという気がしてくるんですが、どうでしょうか、そろそろ時間になってきましたので、そんな前提を踏まえた上で、先生方、制限して申しわけありません、3分ずつ、皆さんにこの問題についての結論とメッセージをお願いします。

坂東 私は、日本の親子の関係というのはあまりにも距離が近過ぎる、お互いに依存し合っている。この距離を置くというのが、精神的自立の一番重要なポイントだろうと思います。アメリカでは、例えば18歳になったら子どもたちは親の家を離れて、学校の寮へ入るとか、あるいは友達とルームシェアするという形で距離を置いて、その中で自立、時には対立を経験しながら、一人の個人として自立していくわけです。

日本の場合は、ほんとうにお互いに支え合う中で、弱者連合と最初に言いましたけれども、お互いに母も娘も力がない中で、資産もないし、いろいろなものを持たない同士が支え合っていきましょうというときには、美しい。しかし、もう既に、強者連合とは言いませんけれども、みんな強いんです。教育も受けているし、働こうと思えば働けるし、長生きするということは健康なことだし、自分たちがそういう力を持っているということを自覚して、やはりつらいけれども、自立を目指さなければいけないだろう。

それは精神的な自立、特に今回は心理学的に、精神的な自立が中心になりましたけれども、階層分化していったら、若い世代が経済的に自立するのが難しい、今後経済的にちゃんとした収入がないかもしれないけれども、親の資産を当てにしないで、経済的にも自立をめざすことが必要だと思います。

もう一つ、生活の上での自立、精神、経済、だけではなく生活の自立というのは、やはり子ども側も、親側も目指さなければならぬだろうと思います。

私は、もともと日本は、女性を母方の親族がサポートすることで妻問婚が成立したし、昔の日本の家屋敷は娘が相続していたんです。ですから、娘のほうにそういう資産を持って夫を迎える。いわば21世紀は、新しい母系制回帰になるのかなということも考えていたことがあるんですけど、それでいくと、血縁内の世代間の助け合いになってしまうわけです。

親と子の縁は、とても強いんですけど、それによって血のつながっていない人を排除してしまいがちになる。何らかの形で、手足を伸ばして、あーっとほっとするような実家的な機能をもつ共同体というか、血がつながらなくても、縁のある人にそういったような場を提供できるという。ワンランク上の母性愛というのかしら、血のつながっているこの娘だけがかわいいという母性愛ではなくて、もう一つ、グレートマザー的な母性愛的にいくと、日本の親子関係はもう少し風通しもよくなるし、お互いに世代間で支え合えるのではないかと期待します。

北村 ありがとうございます。確かに、とっても恵まれた実家がある人と、そうでない人では不公平が生じてくる。みんなの実家というものが、社会の受け皿としてあっていいという

気がしますよね。

坂東 それこそ親だって、私の場合は92歳まで生きていてくれましたけれども、とても早く亡くられる方とか、むしろ娘の介護を必要とする人とか、個人の当たり外れというか、運次第ですよ。それをもう少し広い範囲で支え合えるようにしなくちゃいけないんだろうと思いますね。

北村 なるほど。それは一つのご提言かと思います。

関沢 今、坂東さんからいいお話ありましたけれども、人生の最後については社会的介護、つまり社会的に親を見るということになってきたわけです。同じように、そろそろ社会的育児という、最初も、ほんとうは父親も背負わないといけないんですが、母親だけ閉ざさないで、もうちょっと社会的な中で育てるということをしたほうがいいのではないかと。それが少子化も防ぐのではないかと、母親のノイローゼなども防ぐのではないかとこの気がします。だから、母娘で閉塞しないで、もっと開かれると風通しがよくなる。そこに男たちも入るほうがいいと思います。

馬場さんの歌、拝見していますと、こんな歌を見つけました。

「記憶消え 言葉も消えて 母といて きょうを降る雪を 見ることうつつ」、記憶も消えて言葉も消えてしまっている。でも、母といて、きょう降る雪、雪が降っている、それはうつつ、現実である。幼い頃、お母様を亡くされた日、大雪だったそうです。さっき伺いました。ああ、そうなのか、それがこの歌なのか。「記憶消え 言葉も消えて 母といて きょうを降る雪を 見ることうつつ」。

私も何年前に母を亡くしましたが、やはり何か気配みたいなものをどこかに時々感じる。結局、親と子の関係というのは、そういう深いところで人を動かしていくみたいなのがあって、いろいろトラブルとかめんどごとがあっても、最終的にはそういう形で何か落着くのかなとも思っています。以上です。

北村 ありがとうございます。

松永 はい。今の関沢先生の話で、私自身も十年前に自分の母を亡くしたことを思い出しました。突然死に近い状態で亡くなると思ったこともありませんでした。

今日のテーマ同様、生前は娘として葛藤もありました。母はずっと仕事を続けてきた同性でしたので、いろいろな意味ですごく葛藤はあったのですが、亡くなった直後に、すうっとそのわだかまりが自分の中で消えていく感じがしました。私の中にも、脈々と母から受け継いでいるものが、目に見えない形で確かにあるという実感を持つことができました。

今は、自立するということについて、必要なときに必要なサポートを自分から受けられるという、いい意味での依存も含めた概念として考えられてきています。孤立とか、強い独立というように考え過ぎないで、必要なときに必要なサポートを、遠慮なく自分から受けていくという能力もつけて、その上で自立した個人同士が連帯していけたらいいのかなとも思っています。

北村 ありがとうございます。

何か最近の調査によりますと、あなたは男の子が欲しいか、女の子が欲しいかということで、かつては男の子が欲しいという声が圧倒的だったんですが、最近では女の子が欲しいという声のほうが強いそうでございまして、女の子は一家の資産であるという言い方をする人もいます。そういう意味で、もしかしたら平安の昔に戻ってきているのかもしれない。私たちは資産でございまして、母にとっての資産でございまして。(笑)

結局、娘が持つ力、母が持つ力というのはお互いに必要とされている。それはもうちょっとインナーな、ほんとうの血のつながった母と娘だけではなくて、もしかしたら社会全体が必要としているものなのかもしれません。これからの女性が経済力も身につけ、生活力も身につけ、母と娘の温かい情愛を全うしていける世の中になったらいいと思います。

最後に、時間がないんですけれども、せっかく聞いていただきました馬場先生、一言、現代の討論をお聞きになって、どんなふうにお感じになったか、よろしく願いいたします。

馬場 それでは、聴衆代表として一言感想を述べさせていただきますと、私が自分の家族の崩壊が一番感じたのは、昭和30年代半ばに、そのころ、まだ新品ピカピカの2DKという住居を獲得したときでした。ここに入ったとき、仏壇を置く場所がありませんでした。これでもって祖先と決別をしたわけです。

今、私の家の近辺には、新しい家が山を切り崩して密集しております。私が今の家に住んだときは、おばあちゃんと若夫婦と孫という、三世帯同居のやや広い家が多かったんですが、今は非常に小型の家が増えて、夫婦と子どもだけの家が建っています。それを見ながら、あそこにも仏壇がないに違いないと私は思っています。

このところで、やはり一つの継承というものが、昔を継ぐという心と手がなくなっていくわけなんですね。やはり私はそこは大事なところだと思って、非常に高学歴社会になるのですけれども、知識だけが非常に豊かになって、もう一つ物流だけが豊かになって、そして何かわからなくなる。知識はあるのに、他人のことがわからないということ。他者への理解が非常に欠けているのが現代だろうと思うんです。

私は、恋愛、恋の歌ばかり挙げましたが、恋というのは初めての他者の発見ではないかと思うんです。そこに愛が芽生えるので、他者を発見することがやはり愛の第一歩だと思います。

そんなことから、母親も自立した他者として、娘と母と互いに自立した他者として理解する。そういうことが大事なのではないかということを感じて持ちました。どうも失礼しました。(拍手)

北村 それでは、これでパネルディスカッションを終了させていただきます。先生方、どうもありがとうございました。(拍手)

司会 これにて、女性アカデミア21を終了させていただきます。パネリストの方々を、もう一度大きな拍手でお送りくださいませ。(拍手)なお、今回の内容は、11月4日金曜日の読売新聞朝刊にて詳しくお伝えする予定です。

本日はご来場いただき、ありがとうございました。

— 了 —